

基幹型共同研究プロジェクト

「述語構造の意味範疇の普遍性と多様性—理論的および応用的な成果—」

Prashant PARDESHI (パルデシ・プラシャント)

《研究の概要》

本プロジェクトでは、意味的他動性が出来事の認識とその言語表現および言語習得にどのように反映されるかという問題を解明することを目的とする。日本語とアジアの諸言語を含む世界の35の言語を詳細に比較・検討し、それを通して、日本語などの個別言語の様相の解明だけでなく、言語の多様性と普遍性についての研究に貢献することを目指す。さらに、理論研究の成果を日本語学および日本語教育に還元する目的で、基本動詞の統語・意味的なふるまいを詳細に記述する「基本動詞用法ハンドブック」を作成し、インターネットに公開する。

上記の目標を達成することを目指して以下の4つのグループを立ち上げ共同研究を行った。(A) 言語類型論チーム(共同研究者47名)、(B) 心理言語学チーム(共同研究者5名)、(C) 言語習得チーム(共同研究者4名)、(D) ハンドブック作成チーム(共同研究者26名)。紙幅の関係で理論的観点からの成果の一部として言語類型論チームの成果、応用的観点からの成果の一部としてハンドブック作成チームの成果を紹介する。プロジェクト全体の活動の詳細について以下のホームページを参照されたい

(<http://www.ninjal.ac.jp/research/project/a/jisei-sou/>)。

《主要な成果物》

言語類型論チームでは年に3回公開研究会を開催し、日本語と世界の諸言語の他動性にまつわる諸現象に関する研究を発表した。これの発表を元に27編の論文が収容される論文集を編集し、2014年6月に刊行する予定である(パルデシ・プラシャント、ナロック・ハイコ、桐生和幸(編)『他動性の本質—日本語と諸言語の対照から見えてくるもの(仮題)』くろしお出版)。

また、世界各国の言語(約40語)における有対自他動詞のデータベース(仮称:有対自他動詞の地理

類型論的なデータベース、A Geo-typological Database of Transitivity Pairs)を開発し、今年度中にネットで無償公開する予定である(図1を参照)。

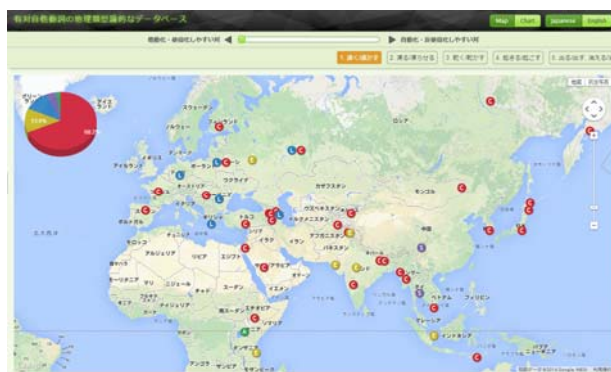


図1: 有対自他動詞の地理類型論的なデータベース
ハンドブック作成チームの成果では基本動詞の見出し執筆のために日本語母語話者正用データコーパスとして『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)を使用し、レキシカルプロファイリングという手法で自他動詞の統語・意味的なふるまいを詳細に調べることを可能とするオンライン検索システムNINJAL-LWP for BCCWJ (NLB)を開発し、2012年6月にインターネットで無償公開した(<http://nlb.ninjal.ac.jp/>) (以下図2を参照)。



図2: NLBの見出し語ウィンドウ

2014年1月15日現在ユーザ数22664名、ページビュー数は232,351ページである。また、見出し執筆の参考のため、日本語母語話者の正用に加えて日本語学習者の誤用データを検索できるようなオンライン検索システムも開発し、2011年12月にインターネットで無償公開した

(<http://www.ninjal.ac.jp/teramuragoyoureishu/>)。日本語学習者の誤用のデータとして故寺村秀夫教授(1928~1990)が大阪大学で残された最後の仕事の1つである『外国人学習者の日本語誤用例集』(1990)を使用した。オンライン版のほかPDF版も提供されている。2014年1月15日現在ユーザ数6010名、ページビュー数は11312ページである(図3を参照)。



図3：寺村誤用例集データベースの検索ウィンドウ

上述のツールを利用して日本語母語話者の正用データおよび日本語学習者の誤用データを検索し、見出し語の統語的および意味的な共起関係、実際の用例、学習者の誤用例などを参照しながら執筆を進めた。ハンドブック見出しの特徴について以下簡単にまとめる。作例の作成に関して、当該動詞の統語的・意味的な振る舞い(例えば能動態と受動態、あるいは肯定形と否定形への偏り、よく共起する副詞など)を考慮に入れ、必要に応じて単文のみならず複文も導入している。本ハンドブックはネットで展開するものであるため、見出し閲覧用インターフェースを開発した(以下図4参照)。音声面の特徴を把握できるようにすべての作例には音声ファイルを付けている。見出し語画面では作例のほか、NLBを利用して抽出した適切な実例も数例参照できる仕組みになっている。認知言語学と対照言語学の知見の反映も特徴の一つである。前者については多義語の意味拡張の背後にある認知的なメカニズム(多義ネットワーク)を提示し、語義間のつながりを視覚的に示している(以下図4の左上を参照)。後者について言えば、本ハンドブックでは日本(語)の文化的な情報に加え、各対照版では日本語と学習者の母語との相違点など対照研究の知見が数多く盛り込まれている。また、さらなる特徴として、従来の辞典と異なり本ハンドブックでは通常共起する語のみならず、共起しない・しにくい非共起例も合わせて載せている点がある。



図4：ハンドブックの見出し語画面

今年度中に見出し約25語をネットで試験的に無償公開する。それにより、現場からのフィードバックを受ける体制が整う予定である。

《特色ある活動》

本プロジェクトの公開研究会は国立国語研究所に加えて日本各地の大学・研究機関(関西学院大学梅田キャンパス、国立民族学博物館、京都大学、東京外国語大学、新潟大学、富山大学)で開催し、開催地近辺の大学の研究者や大学院生に参加していただくよう工夫した。多数の大学院生の参加があった。共同研究をきっかけに国立国語研究所で進められている英文日本語研究ハンドブック(ムートン社)刊行計画の一環として Prashant Pardeshi (NINJAL) and Taro Kageyama (NINJAL) (ed.) *Handbook of Japanese Contrastive Linguistics* を企画した。多くの共同研究がこのハンドブックに寄稿する予定である。プロジェクトの成果を国内外で積極的に発信することにも力を入れた。ドイツの Max Planck Institute for Evolutionary Anthropology やインドで開催された国際学会などで成果を発表した。コーパス検索システム NLB に関して、明治大学、筑波大学、名古屋大学、京都大学、九州大学で講習会を開き、ツールの仕組みや使い方およびコーパスデータに基づく研究の事例を紹介した。基本動詞ハンドブックに関して、北京外国語大学内北京日本学研究中心(中国)やプネー市(インド)での日本語教育機関でワークショップを行い、ハンドブックの仕組み、教育現場における利用の可能性を紹介した。国立国語研究所ジュニアプログラムの一環として立川市錦図書館で小学生に辞書作りについて講演を行った。残り二年間でプロジェクトの研究成果をとりまとめ、その国内外での発信に力を注ぐ予定である。